



大正
31.11
8

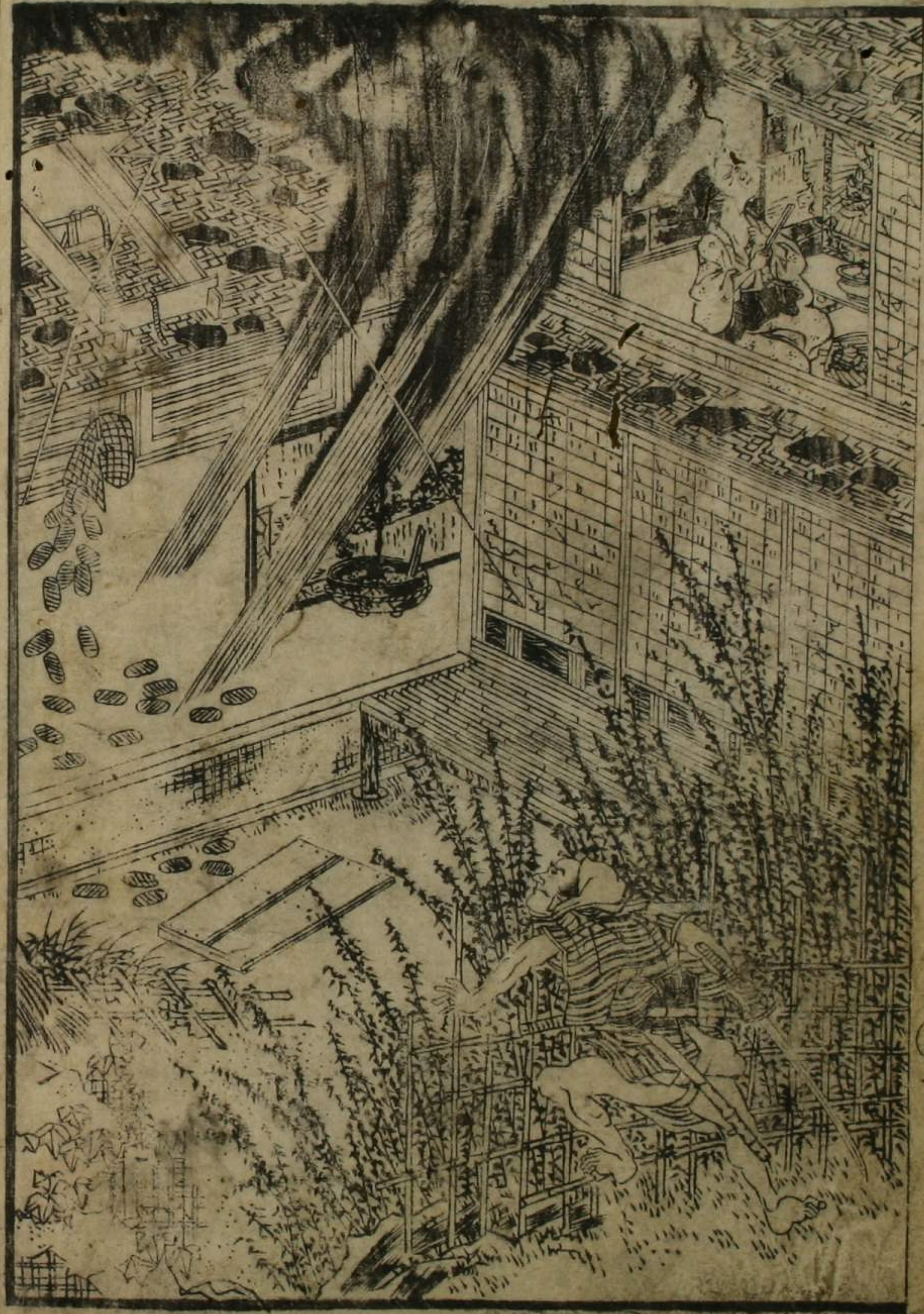


茶磯棠

あつしと。腰に結し。家の引繩。まらばとき。ぐらぐらと。とひと大車。
 裏小降籠。ともし小判の山吹散。舌し。井手の嵐と。さざり。
 彼方の二階。悟の母も。雷鳴。おもしろきて。おびえを。及物と。
 取落し。伏しり。此雷一團の火炎と。多りて。彼武士を。
 打んと。頭上。お落。身体。碎死。て。余兵衛。是を。
 急。の。路。と。い。り。て。わ。ま。さ。え。る。お。引。窓。お。這。う。を。
 葛。布。の。て。其。裏。より。乱。落。し。る。金。多。多。折。し。人。乃。
 お。し。し。て。も。ま。ひ。れ。雷。よ。必。定。此。辺。お。落。つ。ん。今。ひ。の。ひ。を。
 主。の。臍。の。恙。な。れ。と。吐。つ。門。の。戸。と。の。ま。わ。け。て。は。と。
 提灯。と。さ。り。出。せ。へ。米。屋。新。屋。古。手。屋。の。輩。多。り。餘。兵。衛。は。杖。
 躬。と。背。後。お。ひ。く。し。て。い。そ。は。く。い。ひ。る。へ。お。聞。合。な。れ。人。く。よ。と。を。お。



又新言老之三



又新言老之三

十六

昨日おん身等の許すゆれ。此月の晦日まをといひ延ておきけり。夜中の遠慮もつたしと恨め。此方の口とひしうもそいなく我輩。とてふる為にお来む。帳と消ぬ来つる。米薪古手乃價。いひつて矢立の筆把て帳と消受取の昏付。受。餘兵衛の益。此方より其價と償するおれも。いふとあぞと問ふ故帳と出しそ見なつたを。のこは折ぬ。これよりこのちのちの氣づく人我く。許小来。南餘兵衛が債。いふとあぞと問ふ故帳と出しそ見なつたを。のこは折ぬ。これよりこのちのちの氣づく人我く。許小来。南餘兵衛が債。いふとあぞと問ふ故帳と出しそ見なつたを。のこは折ぬ。これよりこのちのちの氣づく人我く。許小来。南餘兵衛が債。

幸小雨もやぬ傘の供してまうんと。欲又轉宿鳥翼を。飯。餘兵衛の頭とふけて。これとあひこれとあひ。いふとあぞと問ふ故帳と出しそ見なつたを。のこは折ぬ。これよりこのちのちの氣づく人我く。許小来。南餘兵衛が債。いふとあぞと問ふ故帳と出しそ見なつたを。のこは折ぬ。これよりこのちのちの氣づく人我く。許小来。南餘兵衛が債。いふとあぞと問ふ故帳と出しそ見なつたを。のこは折ぬ。これよりこのちのちの氣づく人我く。許小来。南餘兵衛が債。

高手小手下くまあげて引立てて来り。お旦那これにありませう。
 先刻ハ幡堤を捉者おん後し金財布と此者奪とん
 して奪れとと折し黄昏の暗まがれぬ。刀の光もあせれぬ。狂
 圖と捨置て逃去し其後そ彼獸雷氣ふりもあせれて忽勢
 猛なり。圖と破てとらひ狂ひぬぐら。其ころふ。金財布の紐雷
 獸の首小掛了。其終天上のや。取戻さんおも翼はなす。
 せんさふさふせめて拙者分説の証ふと。此者と捕一願ふりや
 うみ分そよしく見ぬと。豈もらんや此者は是箕原越右衛門が
 僕沙土七ふゆ。繩打て引立てまわりぬ。金財布と失ひに拙者
 あやまり。一言の分説もいふとらめて打をわれ。あやまりいひし

体多り。庄司これと聞とひとく。掌と撲的打其て我不審
 ぬれぬ。夢平るるも愁るべくも。其財布ハ此ぬ。金乃数も
 五十兩一枚も不足す。とらひ。夢平これと見て。一旦天上のさ
 其財布がふふし。此ぬ。やとらひぬ。庄司又夢平お向ひ。其
 沙土七ふゆ。金美かや。彼所の松お繫おき。汝守りて逃さるや
 心とつゆよとらひてとらひけ。餘兵衛おひひてひひる。汝が父
 十字兵衛ハ從來老實なる者。阿曾比さふ心とらひぬ。不義
 の金とつゆ捨べき者ぬ。わらぬ。去。年。自。殺。せ。始。末。と。疑。ひ
 ち。か。り。ぬ。我。腹。心。の。者。と。暗。に。都。の。か。せ。五。条。坂。お。つ。ら。て。極。其
 と。聞。ゆ。ぬ。是。て。我。推。量。ふ。ら。ぬ。と。兒。子。餘。吾。郎。富。士。屋。の。吾
 妻。と。し。阿。曾。比。の。と。ら。ぬ。祠。堂。金。石。塔。料。と。ら。ぬ。捨。て。る。罪。を

十字兵衛おのれが身は引受て腹一。我君より賜う朝鳥
 の~~...~~費代りて石塔料おまう。明白ふ知らる。あり。
 これによりて我餘吾郎が行方とさう。手打ふもまぐくあり
 めれども。さあ。時へ十字兵衛の犬死ふ。道理なれ。胸をきりて
 捨おれぬ。これをきりて。兒子とさうふ。唯十字兵衛が志と
 失ふ。あまのびざらぬ。汝も母子とも速に飯を原のぐく
 家と立つ。さうか。おのれども。是又さう。餘吾郎が罪を
 あらう。おのれをさう。わらう。時へ十字兵衛が心おさう。これといん
 とも。さう。さう。我心おさう。で金と泥。捨玉と淵。おれぬ。
 此君今とさう。其腹。右衛門。袴田。紺九郎。等。兩人
 と捕人。さう。上京。さう。幸ひ。おれ。此僕。夢平。さう。さう。

汝が住家とさう。お。貪け。様子。聞暗。お。お。お。
 先刻八幡堤にて。夢平。此財布の金五十兩と泣。お。お。お。
 とさう。さう。今聞。雷。お。お。此金と失ひ。さう。さう。
 野も。お。お。此家の。お。お。正是。皇天。お。お。お。
 さう。お。お。此金と授け。お。お。お。お。お。お。お。
 来。お。お。今朝。米屋。古手屋。の者。お。お。お。
 債と償。お。お。我。夢平。お。お。お。お。お。お。お。
 殺。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
 理。お。お。此金。お。お。心。お。お。お。お。お。お。お。
 戴。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
 七。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
 父。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
 忠。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
 義。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
 の。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。

慈悲深き志と感歎して落涙利り。時不ふ隙ひまの障子と
 ひまも母真弓のうらり出いで。庄司の向むかひ。 恭まことしく礼れいとあそび
 てひひるひのさぐり老お。健たけふあつを沙さ容よう体たいと拜まがしうらとびふうへ
 たぐらん。夫おとこ十字じゅうじ兵衛べいゑ不忠ふちゆうとありて自殺じこくしうへと。今いままでも恨うらみ
 居ゐひの今いま彼かれ処ところまでおん物語ものがたりと受けさうりひんをさうふあわぬ
 忠死ちゆうじのうら。さありてこそとたぐりくおひひんづり。我われくどおん憐あはれ
 しく。債ちゆうと償たがひとさうらのさうらん。許多あまの金かねとさうらるゆ。何なにとりて
 此大恩このおんの報むかひひんさうらひて。頻しばしばに涙なみだと落おしえんば。餘あま兵衛べいゑの驚おどろ
 母人ははの耳みみが聞きえひうとひふあぞ。母ははも心こころつきて。げおもくともひて
 うら驚おどろき。今いま何なにとつらひき。我われ汝なつかが貧窮ひんきゆうとさうらふふのびきと
 一口ひとくちと減へして貧ひん苦くとさうらんといひひ。二階にがいのちりて自害じがいせん

まゝ今いまの雷鳴らいめい心の臟ぐらとつらひやふおぢさうらさうら雷らい乃なり
 響ひびひ病根びやうこんと打破たひやりて。我われ聾ろうのさうりしうとひひて。我身わがみながら
 不思議ふしぎにおりんを。餘あま兵衛べいゑの聞きて益まかとうき。そふ危あやうもさうら
 拙者せつしやも又また母人ははの為ためふ窓太郎まどたろうと殺ころして一口ひとくちと減へしうらんと存ぞんす
 ともふ打うんと振あ上ある刀やいばの手ての裏うら雷鳴らいめいやさふ自然しぜんと狂くるひ
 打う換かしひしうらん。母はは又またうら。経きやう惟ただ子ことさひひて着きさう順のり礼れい乃なり
 祥衣しやうい少すくの觀音くわんおんの影かげもあり。今いまの雷鳴らいめい我われ自害じがいとさうら。沙さが
 狂くるへせし。雲雷うんらい鼓こ掣せつ電でん刀やいば争まが段だんと壞こわの經きやう文ぶんひさうら。日ひ來きた信しん
 菩薩ぼさつの擁護ようごふさうひさうら。歎なげ喜きしてさうら。窓太郎まどたろうの
 又また真弓まゆみが側そばに立た寄よりて。祖母そぼさま移うつりてさうら。膝ひざは
 上うへりて抱かかりて。窓太郎まどたろうの移うつりてさうら。お礼れいとせぬ

不礼な奴と口へ呵と心へ。此祖母や多父の手不あらんは危
 危き不便の孫やとまりひて抱きあめて。とく涙へとまきしむ
 時ふ又夢平いそがりく来りそり。沙土七りおひせの通彼処の
 松小敷系お死ひが。此処の竹林きふ小雷死しおひき死駭ふとく
 見ゆ心かのお見知し者やうにわがえひとら。庄司へこそと
 聞しひとくはと立上り。餘兵衛ふそりびと把しそ。外の方お出
 来里かの死骸と點檢するふ身体をけ焼爛するしとく。袴田
 紺九郎小疑ひ。さそ我あふつけ来り。打ふせんしとく。
 今の雷小打きて死しとらふん。惶べしとく。舊のともふ
 臥て座し。又餘兵衛母子小對てし。汝等兩人母ハ慈悲あり
 子ハ孝あり。今の迅雷母の自害とら。子の刃の手と在しとて

孫の命ともひふ。都是天の憐とわらう。其小わらうと
 紺九郎が雷小打きて死し。さる彼が不忠と天の罰しとく。其
 疑ひ。彼しひ是とら。天の賞罰正まきとく。如く。善悪
 報應因果觀面の天理彰々として毫釐もゆるさる。孝の
 天と感ずあり。例勝て計べし。悪人の雷死せ。例も又鮮ど
 家貧して孝子顯る世乱て忠臣と識し。王良が言宜哉。汝我
 禄と受し。昔のやうに。其孝とわらはし。とらひて感嘆轉やま
 かり。又い。我汝とて。既衆させ。おひと。一旦追払ひし
 者なれば。私のもうひふ。是我苦き。何れを。何の功と
 立し。其功し。如此个様あり。餘兵衛が耳小つきて。何事か
 くれ心。餘兵衛ハ點頭て。とみわけ。とらゆ。と答る。わけて庄司ハ

別と告て門外小立出る時雨過雲散て一輪の明月皎々として
 如やん恰白日の如あり。此折し一餘吾郎吾妻しとり此家
 とつが来王。餘吾郎且父在司のむ礼とおもひてり。我
 不忠不孝ホして尊顔と拜とて之を面取。分説ハ切腹より
 外ありと存せり。十字兵衛が賣代をせ朝鳥の刀を買は
 これを餘兵衛に返し与へて彼が家と立ち使ふもとあり。都
 小今まをさるる人のあり。此吾妻。射屋賀堂左衛門の者
 と欺まかの刀と取りてて爰あり。我吾妻の心とて偽狂人
 とありて堂左衛門が行方とつが先刻とて途中の
 吾妻の行わぬ彼の本心と聞且露取もあひ堂左衛門の善
 心ありて切腹しす。更おみ兄餘兵衛との拙者と憐まふ

更と女聞ゆべつ。罪あり死者の拙者あり。露助とトも別
 僕路平がこふい。いざ。餘兵衛これと受取とつて朝鳥の刀は
 十字兵衛が位牌とてして。餘兵衛これとて戴て
 おさる。餘吾郎又父に向ひ十字兵衛が遺しおきの此竹の刀を
 唯今切腹つらんがせめて拙者が分説のみあり。いざ。餘兵衛介錯頼
 とつひまをせむ。竹刀を抜放して腹を突立んとあり。これに餘兵衛
 へ聯おしとむ。吾妻も其手ありつとて。決と落し。いひ分あふ
 おんをさる。十字兵衛との失ひ。其原とつがぬれば妻が身より
 更おこれ。餘兵衛との親子の衆も合とて顔あり。殊更前をど
 途中を露助がめるとつが。堂左衛門の妾が同胞の兄あり。い
 ねとつひこれとまじ。妾を死にせむ。皆さぬいさむ。いさむ。

わみつ竹刀と挑取ておのれが吐ふつとせんとせむ。餘吾郎まう
おしとめいあく我う先死後かきごころひて互ふとわ川とめ
られつ死とわくそひ一が庄司の態声わらふふ二人と呵彼竹刀と
とりわけて。餘吾郎が目さるふとらけこれとは見よ

拙者此等の切腹は死ぶおぬふり極
佛經氣涉ねたれま

かくの如くある一とん。十字兵衛汝の性質とく知て死しつる後
まで諫言とく人んと忠義の魂と筆残しつる。昼置みわらふるやと
つひきしてひそふ落涙しつる。又つひきつる。憎しとあふ汝はれど
是まを其怪しとせしん。十字兵衛が切らる。切らる志と失ふまどと
おしとめいあく今自殺する。則此各置の如く十字兵衛は

あり。あつちのうへに昨夜淀願我族宿する。来星を物語り聞て。
兄餘字兵衛汝と家督の願を。願を。とてお刺髪を。とつる。あつち
とん猶更ふ汝死しつる。餘字兵衛が志と悖つる。と。家相續を断
理あり。若又強て死んしつる。七生まをの勘當を。吾妻又ハ同
家中嘴元浪右衛門の養女にて原孝のよめ身と賣しるはこれ
餘吾郎と格別なり。汝も今死しつる。始の孝と失ひて。つりて
養父の不孝とる。これとくくりきまふ。餘吾郎汝今死んと
おりの一命とつらら。とつららとあつちとあつちとあつちと
立る仔細の具の餘字兵衛のつららあつちつれを。彼と心と合せと
互ふ功と立よ。あつち。時ハ十字兵衛も冥途におきそよらと。一功
立よ。其時ハ飯桑とさ。あつちとあつちとあつちと。吾妻と妻女とのつららと

つひに、いれ、い、真、余、兵衛、も、傍、より、こゝろ、を、そ、自、殺、を、し、め、
る、も、也。餘、吾、郎、も、吾、妻、も、死、ぬ、死、ぬ、義、理、と、あり。兩、人、と、り、あ、い、
る、う、き、て、詞、を、在、司、又、餘、兵、衛、小、向、ひ、十、字、兵、衛、一、且、餘、吾、郎、が、
小、賣、代、が、い、し、其、朝、鳥、の、刀、再、汝、が、手、あ、り、し、も、反、喃、の、音、あ、り、
汝、が、徳、の、天、小、通、が、い、ち、ち、あ、る、と、い、く、も、音、あ、り、汝、笛、あ、る、と、い、
よ、く、も、い、し、號、笛、と、い、く、俗、の、い、叫、子、笛、あ、り、こ、れ、軍、器、の、二、つ、あ、る、
い、も、尋、常、の、叫、子、笛、八、深、山、幽、谷、の、濕、地、に、於、て、こ、れ、を、吹、は、し、音、を、
出、さ、し、汝、が、工夫、と、り、て、濕、地、と、い、く、も、よ、く、音、と、出、し、叫、子、笛、と、い、
下、後、時、あ、る、と、用、る、時、あ、る、ん、と、い、く、も、時、も、傍、邊、の、竹、林、を、
か、し、分、て、箕、腹、蟻、右、衛、門、あ、る、れ、ぬ、の、い、と、い、く、も、刀、を、抜、て、在、司、と、
目、か、け、唯、一、打、と、斬、つ、け、し、り、在、司、は、速、く、身、を、ひ、き、り、早、足、と、い、く、

地上、小、踏、仆、の、け、ら、ぬ、お、倒、し、る、と、足、下、よ、ろ、ろ、け、や、と、い、く、も、打、た、
至、極、我、君、命、と、い、う、汝、と、紺、九、郎、が、行、方、と、い、く、も、上、京、せ、り、
兩、人、と、い、く、も、來、て、身、と、失、ふ、皆、是、天、罰、の、あ、る、と、い、く、も、汝、
紺、九、郎、と、心、と、合、せ、月、影、个、谷、梅、个、谷、の、兩、家、と、亡、し、ん、と、隠、謀、と、
企、し、る、こ、と、密、書、し、り、て、分、明、さ、し、殊、更、汝、餘、吾、郎、と、い、く、も、遊、里、
い、し、る、ひ、し、り、事、起、て、十、字、兵、衛、自、殺、し、れ、ぬ、と、十、字、兵、衛、が、い、ち、ち、
餘、敵、あり、彼、が、魂、と、筆、残、し、り、此、竹、刀、ハ、竹、鏢、同、然、主、君、と、執、事、を、
更、と、い、く、も、大、罪、人、と、戮、さ、る、幸、の、刑、具、あり、不、忠、の、報、と、い、く、
あ、れ、と、叫、び、呼、ぶ、力、と、い、く、も、竹、刀、と、叱、め、つ、ぬ、さ、し、れ、ぬ、と、蟻、右、衛、門、ハ、
一、声、さ、げ、び、手、足、と、り、き、苦、む、体、倒、し、ぬ、目、へ、こ、ろ、ろ、く、こ、ろ、ろ、れ、ぬ、
か、て、在、司、竹、刀、と、引、抜、れ、ぬ、と、蟻、右、衛、門、ハ、息、絶、し、り、餘、兵、衛、ハ、こ、ろ、ろ、

手拭とりて刀の血と清むれば。庄司へ刀と鞘とあきらめ、やよ餘吾郎
此竹刀へ汝が一生の守とりて。短慮功とまきどとよ常言と忘る
ふとつひそとくたれ石。餘吾郎いお戴てぞ帯よりたる。庄司又つひ
多々。時刻ろれれば我の旅宿小飯とす。餘兵衛汝へ此蟻右衛門と紺
九郎が首と打わさる。旅宿小持泰せよ。沙土七の彼等兩人が
隠悪の證合ふれば。生捕の怪強倉小率て飯らん。豊平其繩つ
と引立て我供せよと命トツ立出ま。餘吾郎吾妻真弓餘兵衛
のらとこ小門かろして。庄司が背後と伏拜と。感激の涙小袖とそ
らがりたる

○かくて庄司へ蟻右衛門紺九郎が首級と携へ。妻淀瀬へ堂
左衛門が首級と携へ。豊平小沙土七と率せて鎌倉小飯り

主君判官の面前小出て庄司且かの兩人の首級を实檢よ
そまよ。淀瀬へ堂左衛門が首級と出して軍用金の賊あることと
告且餘字兵衛が都と殺す。謂とろくきまをあら判官
其志と感賞あり。紺九郎と打とりま。豊と梅ヶ谷小傳沙土
七と誅戮を是等の度とろくろくし。唯わいひさ
あるの。庄司が餘吾郎南餘兵衛等二人の者小功と立よと
とろく。何等の功のや後くの巻と讀得てあらん
⑬ きりしる夢へまこと。茂林の闇打
夫の扱おき爰ふ又一段の事の端と惹出せり。是のうある度とろれと。
月影谷判官の息女今年十五歳小至ゆ。頃日病の床小困ゆ。ひ
一切のそりき。アとれと。祿とす。醫師へ更命。世小まぐとす

良医とりて治術と尽さずとて露もりも験なく漸勞と
 ぬらひ面瘦身かそりて日小異ふおくり有りまうりあふぞ父母の君ハ
 更なり傳の人ぐも愁悲とくわらひ病ゆおん容躰とさうく
 物怪の所為あわらむや。りちるるる良薬も験あたらしく
 兎角神仏の冥助と神あまらくべしと有験の高僧お憫祈を
 尽さず諸社お幣帛と奉て丹精とくじあひ母君ハ侍女とくく
 鶴ヶ岡の涉社お日参さあひる一日一個の侍女ハの涉社お参詣
 祈念あうて下向の折や。庭さるるの宮奴寺瑞籬の下お集ひく
 物語もお聞バ巨福路坂お太麻の親女とあり寄絃お寄乃
 上手ふて仏教ふも通達し難病奇疾物怪の祟をく其もとと
 あきくも鏡お物の影とくも如く実活も神佛とくもに

噂もると。彼侍女聞つて。これハ此社のおりん神は占ふ託して告あ
 うらわと喜びて。道と急て館お飯屋。おん母君お介様くとく
 くれ。母君もいと喜びあひて判官お告さしえ。其親女とく叫遊
 とおあて巨福路坂へ使と立ちあひる太麻の親女呂お應とて
 やがて館お参られ。姫の病架お近く叫入あひ判官夫婦對面
 ありて後寄絃とをあやせ。親女つしと且神保とく人梓のら
 と打鳴しと冥道とわら。目と閉て無心おありる。あふら
 よらや。去ぬ。延文四年信濃國管形で亡る。相模次郎時行の
 怨霊梓の弓あひれ出て親女あつさ。判官お對してしあふら。我南
 帝の來免とわらうて整懐の旗と飄し。北朝とくふけて累年
 の憤積とくわらやとおりの立ぬらふも。運命つらうとてぬらふ



洗米
の
化
体
め

又成言卷之三

七



又成言卷之三

七きれ股肱耳目とこのころ。大佛九郎負直より知具麻川へ入水して。底の水質と成果ぬれを。生残る味方の者も。忽心変して皆定利へ降参し。今我輩の亡跡とこの者よふたを。無縁の鬼と有り修羅の眷属と成て嗔恚と含む心止時を。永劫悪趣とまぬくを。夏あさむれば其恨と散ぜん。當家へ出宗となり。先汝が娘と取殺して無間地獄ふしと。去共へ呵責とらけり。おひく汝等とも取殺して。遂に當家と絶まなくありあつたり。あるふひぬれも。苦形落城の刻汝が手へ入る。日月のちん旗當家へひめありしゆを。是ふおきて近づく夏あさむ。むありく年月と過せ。近比のちん旗と鶴ヶ岡の神庫へおきり。ゆかりの時を得て。崇とさると。瓜得たり。んく娘へ更なり汝等夫婦。子

玉鬼之助と始一族郎等ふり。るるを皆取殺して。無間地獄へ墮して。怨とせ。さんさん。ゆかり。んく。其。は。ん。え。を。怒。声。ハ。其。人。ユ。向ひて聞が。如くゆて。おさる。も。い。ん。ん。母君と始此。ふ。あ。じ。人ぐ。これと。聞て。大。小。驚。ま。き。る。判。官。ハ。半。ハ。信。ト。半。ハ。さ。び。ひ。て。現。女。小。向。ひ。怨。霊。の。仔細。と。の。ひ。て。詰。問。あ。へ。現。女。ハ。これと。聞。妾。先。試。ひ。ま。夏。あり。と。洗。米。と。う。り。を。押。の。ら。と。載。る。小。櫃。や。を。と。る。物。の上。に。蒔。散。して。ま。ま。ま。姫。の。枕。上。に。持。行。此。洗。米。と。手。づ。拾。取。て。や。ま。ま。姫。ハ。侍。女。等。小。扶。起。さ。し。て。か。の。器。小。む。く。洗。米。と。し。取。て。ま。ま。ま。ゆ。ひ。ら。る。あ。か。怪。彼。米。粒。忽。輕。小。化。して。春。蠶。さ。な。は。姫。ハ。これと。見。て。打。ま。り。た。あ。ま。や。と。呼。て。伏。せ。る。ハ。母。君。と。始。い。づ。この。侍。女。等。も。身。の。毛。を。づ。ら。ち。て。お。それ。あ。ひ。ぬ。さ。ま。姫。と。介。抱。して。藥。を。

其の世を多ふ。漸獲生くと心得あり。時の現女のひく。怨霊を
 無間地獄のいさむらんと言ふ。其故無間地獄に墮る
 者。此世のあり。食物を化して食する。今現示此あり。疑ふ。物とめ。此怨霊と静ん。眼前の奇怪と見ひて疑と決。此怨霊と静ん。今現示此あり。疑ふ。物とめ。此怨霊と静ん。眼前の奇怪と見ひて疑と決。此怨霊と静ん。

踏し。時行の靈修羅の眷属あり。日月の現旗を
 三十三天の上を責りて。帝釈の居所と追落し。欲界の衆生
 と悉我有小。時諸天善神善法堂に集りて。般若
 經と講し。此時虚空より輪寶下りて。劍戟と雨し。修羅の
 輩とす。割切し。これを時行の靈と静玉の。般若真諱
 の功が。謝物とし。現女へ奉納し。受納して。先達て鶴
 先達て鶴。奉納せ。日月の旗と。借受來。給。急ぎ鶴。

先帝帛と進め神樂と奏して神慮と慰し。神司小告て彼
 御旗と借受ふ。是と携へて飯路小臨時に夜圍ふに至る。
 此夜ハ雨雲月とついでいと暗く多る。淡右衛門ハ許彦の供
 人小前後とまわりして極樂寺の切通しと過る時、茂林の裏
 より黒き装束ある曲者兩人あつれ出前後の挑灯と斬落し。
 刀と電光の如くふひふとこれ。供人等ハ臆してまわり逃去せ
 あり。刀と抜て戦とあり。防りて皆散ぐ。逃去ぬ。淡右衛門ハ
 懐の御旗と大身と守護まを戦と好まどし。と。彼曲者等
 順風の落葉急水の游魚の如く小走り。刀とついで。鏡とそら
 斬つれば。止こらぬ。得ど抜合せて打合ぬ。其又音ハ松を
 うらた。松風又響音あひて。いとのこらぬ。茂林木原あつれ。近こ

禪院の鉦鼓の音のひましく。鳴ま。宿鳥の声も。更こる。
 夜の暗り。又うたも。あどらの探り。打刀の光。息づ。ひを
 心あて。小戦。或ハ石の地藏。斬つけて。火花と散し。或ハ同士打
 と。血煙と立ちあ。く時とぞ。うら。淡右衛門ハ曾。劍
 法。み達し。これ。神。ひ。う。て。と。打身と。く。丁と。斬
 二人の曲者。あ。ま。手と。あ。を。多。み。ぞ。曲者等ハ。敵。し。う。や
 ろ。ひ。え。早足と。出。して。逃。去。ぬ。此。時。や。く。雲。散。月。あ。つ。れ。て
 あ。き。う。ら。り。淡。右。衛。門。ハ。彼。等。と。打。り。じ。う。ら。り。と。く。あ。ひ。て
 一。息。つ。ま。り。折。し。も。あ。れ。茂。林。の。裏。ハ。弦。音。高。く。漂。と。ひ。み。き。
 一。ま。ぢ。の。箭。並。来。了。て。淡。右。衛。門。ハ。胸。さ。と。筈。深。み。射。し。れ。た。
 さ。し。も。強。氣。の。淡。右。衛。門。ハ。ま。り。う。ら。り。ひ。と。と。あ。呀。と。さ。け。び。て。後。よ

嘯と打倒と。箭疵の鮮血懐み流し入て。涉旗とくぐりた。
 涉旗ハ忽懐と放出て空中みひりりきぬ。時ハ茂林の
 裏より。樂頭中み錦の野袴金拵の腰刀のきりりと帯さ
 曲者ニ所藤の弓と携て歩出。空中みひりりく。涉旗と手早く
 把て懐み押入て。莞尔と笑不敵のありさぬ。唯者とみえんきりり。
 時み淡右衛門ハ息吹く一て刀と杖み起上上。懐とさぐりて
 涉旗のくぐりみ仰天一。くぐりくぐりて又倒ぬ曲者ハかづきけ。
 淡右衛門とのけささみ賜え一て。彼ッ刀と拾ひ取とりの又一を。
 老當の音と止て。衣服蛇の昇天と。望むきさの其骨柄
 折了撞出と三更の鐘のひびきとりのりく。行方もたれど
 ありにり。備此辺の里人等。淡右衛門が死骸とみつけて。駭立

さちみ月影今谷の館み註進一たれを。山咲庄司雪丸。
 の役目とくぐり。僕夢平み挑灯りさせて此所み来上。淡右衛門
 不慮の横死と悲しむ。胸み立上る箭と抜取箭の報を
 見てくぐり居る所みく人の告ぐるや。淡右衛門が妻於破矢
 兇子動之助とともれ夢路とくぐりて走と来つむ。
 骸みよりつきて。前後不覚み號哭現心もたれ休あり。庄司も
 共に落涙し。和主等の愁腸さぞあつん。あつる忠義の武士を
 可惜可悲といひて。あつる歎み沈し。やわりてつひく。餘乃
 物み心とくげど。涉旗をりと奪去る曲者ハ。さくの盜賊あり
 ぞ。察する所南朝み心とくぐりて。輩ありんともひたれ。動之助
 涙とくぐり。君父の讐み共と。天と載むとくげとくぐり。

又此言卷之三
三十三
つひ残す。夢平と具して立飯れば。母の於破矢々雪木が深き情と
感歎し。動之助とりつとまおむき。骸と抱起せ。疵口より血
激る血のぬひひ鼻とおそひて。脛身上へ冷て色喪諸行無常の
青嵐溢てゆき。草の花寂滅為樂の短夜も碎て消し苔の露
目もわてしれぬ。ありまきまきんべも又も歎不院し。森の鳥恋もこりて
鳴声し。曉近くぞありふる。嗚呼此淡右衛門初駕籠の塵兵衛
とらひ一時へ貧苦のよしの。後小祿と賜りてやうやく心と安んざと
とらひ。今又此災ふかるそ非命の死も。正是父五六院左衛門宗繁
が鳥惡其子小報所ある。常言の一分の惡とる共十分の惡報
ありとらふも定なり。豈怖ざらんや

双蝶記卷之五終

